

## ミキ先生の文化財保護

岸 田 裕 之

はじめに

私は、一九七二年四月、初めて教師となって広島文教女子大学に赴任し、日本史学を講じたが、三年後には転出していった。はや二十年も前のことである。

寄稿の御依頼があつて、日頃から付けている簡単な行動メモを取り出し、めくつてみた。やはり、その一九七四年十一月八日(金)の欄に「守る会と学園の会談」とあつた。「守る会」とは、「中小田古墳」を守る会」のことである。

附属高等学校の敷地を安佐市民病院建設のため広島市に譲渡することになった武田学園は、広島県総務部文教課の指導のもとに新しい用地を高陽町中小田の丘陵に決定し、同年九月から付帯工事を始める予定であつた。ところが、三角縁四神四獣鏡吾作銘が出土した中小田古墳の所在地であることが判明し、八月三十一日考古学関係者らによつて守る会が組織され、その保存運動が起こつたのである。

## 一 中小田古墳群の保存運動と武田学園

私は、専門が近かったため、守る会から学園の方と話し合いたいの話を受け、それを仲立ちすることになったが、ミキ先生らも応諾され、当日に至った。

私も隅の方で傍聴していたが、学長室における会談は、双方礼儀正しい穏やかなものであった。私はこの問題についてそれ以上両者とも関わりはもたなかったが、会談後、ミキ先生が学園関係者に対し、保存運動を進めている人たちは普通の人たちですね、と言われたということを知り、仲立ちした意味はあったと思つた。

守る会は、街頭署名運動を展開し、十一月十九日には広島市議会に請願書、二十二日には県知事・県教育長に要望書、十二月十七日には県議会に請願書を提出した。その運動は新聞各紙にも取り上げられ、県や市の文化財保護行政が問題になった。

「中小田古墳」を守る会が記述した「広島市中小田古墳群の保存運動とその展望」（『考古学研究』二十七卷三号、「展望」欄の6～15頁、一九八〇年十二月）によると、「『中小田』の問題が起きる直接的原因としていくつものものが挙げられるが、それらはいずれも行政側が責任を負うべきものである」とし、県文教課の指導不足、行政内部での連絡体制がきわめてあいまいな状態、文化庁の通達の三点を挙げ、それぞれ具体的に説明を加えている（7～8頁）。

しかし、責任が大部分行政にあるといっても、保存か破壊かの選択は、これを機にさらに環境を整備・充実して女子教育発展の構想を前進させようとする武田学園の判断とその対応にかかっていた。

学園内部の話し合いの経緯はもちろん知らないが、後年になって私は、学園が結果的には中小田用地を利用するのを断念したことを知った。おそらくミキ先生の教育観に基づくものであったと推察する。守る会との会談の席でも話されていたが、教育に関わる者が地域社会の歴史・文化を学習するうえに貴重な教材である遺跡を破壊してはいけない、そういうことではなかったか。

守る会は、そのことについて、「『中小田』の危機回避は武田学園の一方的負担という形で現れることとなった。一九七六年十月二十一日、再度の武田学園との面談において、学園側は移転予定地の変更を表明、表面的には危機は去った。しかし、それは史跡指定、公費買上げ、代替地あっせんという根本的な解決ではなく……」と記している（前掲『考古学研究』所収の展望9頁）。

## 二 ミキ先生の英断とそのころ

これは、学園の責任者としてのミキ先生の英断であった。それは、正義に生きるミキ先生の証<sup>あかし</sup>であった。自らの価値観に基づく判断によって貴重な文化財を破壊することを回避し、以来二〇年間、開発優先の時代状況のなかにおいて、それから隔離して保存し、地域社会に大きな文化的財産を残したこの功績について、関係者はどう受けとめるべきか、厳しく且つ重いものがあるといえる。

ミキ先生はその信念ゆえに頑固であったが、人の意見もよく聞いて考える人であった。中小田古墳の問題に関しても、いろいろな多方面の意見を聴かれ、学園中枢においても相談を重ねて決断されたと思われる。この晴天の霹靂ともいえる問題を真正面から真剣に受けとめ、学園の将来構想と関係づけて考え、また中小田古墳群の学問的重要

一、大学人としてともに生きて

性に理解を示し、そのため苦悩を深めながらもその保存に重きをおいた決断の度量たるや並大抵のものではない。ミキ先生は、ギリギリの局面で選択を誤らなかつたと私は考える。私にとつて若いころの在職中に起こつたこの事件のその後は、ミキ先生の「こころ」とその実践の所産として学ぶところの大きく且つ深いものであつた。その意味において、ミキ先生の功績は、武田学園や教育界への貢献にとどまるものではない。人間がそれぞれの立場から伝統的な文化・文化財にどう対応していくべきか、身を犠牲にすることを恐れずに問いかけたものであつたといつてよい。

おわりに

あれから二十年、守る会で運動した人たちも現在研究・教育や行政の任にあり、なお各地で激しく進行する埋蔵文化財の破壊のまゝに苦悩していると思われる。

中小田古墳群は、いまだ史跡指定、公費買上げによる整備の段階にまで至つていない。

「中小田古墳群はどうあるべきか」という、ミキ先生の決断に至るまでのその苦悩は、自らが直接的に関わらざるをえなかつた一古墳群の問題にとどまらず、地域社会の文化的遺産はより良好に保存し、且つ教育に活用していく状況を整備していかなければならないとするこの種の問題の原点に発したものであり、それゆゑに開発優先の時代における埋蔵文化財破壊に対する警鐘でもあつた。

これは、まさに保存運動を進めた人たちと共有できる「こころ」であり、それが守る会への市民の理解を深め、支援を拡げる結果にもなつた。

ミキ先生も、それが広く継承され、一層大きく発展していくことを願っておられるに違いない。

ミキ先生の人物についてはるか人生の後輩の私がいうのも憚られるが、小さいことにも細かったが、大きいことともきちんとできる方であった。

御冥福を心からお祈り申し上げたい。